



ベルギーの聖ペテロ・パウロ教会にあるジャン・ミシェル・デ・コクシー作「ザビエルと大友義鎮の出会い」(1691年)

大友時代を
生きた人々

鹿毛 敏夫

豊後大友家当主として最も有名な宗麟(こと第21代大友義鎮)は、享祿3(1530)年に生まれました。10歳の天文8(1539)年に元服し、翌年、室町幕府12代将軍足利義晴の一字を受けて義鎮を名乗ります。天文19(1550)年2月、

大友義鎮

家督継承を巡る混乱で父義隆が49歳で横死したことを受け、21歳で家督を継ぎます。以後、天正15(1587)年5月に58歳で没するまで、九州の6カ国守護として京都の幕府や織田信長、豊臣秀吉らと連携しながら領国の統治を進めたのです。従来、評伝や小説上での大友義鎮は、「全盛期に日本と東アジアの史的展開上、大きな勢力を保持したが、晩年にキリスト教を狂信したために領国経営を破綻させ大友家を滅亡へ導いた」とする歴史的評価が一般的です。

例えば、遠藤周作王の挽歌では、戦乱にあけくれた人間の内面の葛藤に焦点を当てています。ザビエルとの出会いが心の中に光を投げ掛け、安寧を得るためにキリスト教理想国家を追い求め、やがて落日する一と、義鎮の心情を鮮やかに描くことで読者を魅了します。昭和から平成にかけての研究や小説家は、ことさらにキリシタン大名の悲哀という側面から人間義鎮を描いてきました。

求められる新たな人物像

その結果、現代の日本史叙述における大友義鎮像は、信長、秀吉、その他一般的な戦国大名とは極めて異質な、宗教で身を滅ぼした人物としてのイメージが定着してしまっただけです。しかしながら、こうした義鎮像の原典をたどっていくと、意外にもその根拠が薄弱であることに気がきます。創作や推測を限りなく減じ、より信頼性の高い一次史料に沿った新しい「令和の大友義鎮像」を、歴史科学に基づいて構築する姿勢が求められます。その新たな人物像の鍵は、宗麟を名乗った晩年の14年間よりも、義鎮の名で活躍した10代から30代前半の若い時期にあるでしょう。

地域社会の守護公権力として領国を統治する義鎮の諸政策を見ながら成長し、その父の死と家督継承の衝撃を乗り越えた青年期。京都の中央政権の動向を見据えながら、北部九州に拡大した領土と領海の統治にまい進し、ヨーロッパから訪れた未知なる宗教の宣教師や、外交交渉のため来日したアジアの宗主国からの国家使節に果敢に向き合った義鎮期の諸活動は、彼の人間性が確立していく過程そのものであったに違いありません。

(名古屋学院大学国際文化学部教授)

11月1回掲載